

埋文よこはま 3

財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター 平成 13 年 3 月 7 日 発行

鶴見区

上台北遺跡

弥生時代後期小貝塚の発見

遺跡のあらましと発掘調査 かみだいきた 上台北遺跡は JR 鶴見駅北西約 2.6km、南東流する鶴見川南岸の台地上にあります。昭和 53 年に鶴見区史刊行委員会が一部を発掘し、縄文時代中期と弥生時代後期の竪穴住居跡を発見しました。これより前、昭和 33 年には耕作中に人面付土器が発見されています。この特異な土器は弥生時代後期の壺形土器で、昭和 59 年に神奈川県の重要文化財に指定されました。

今回の発掘は、横浜市消防局による震災対策用防火水槽設置に伴うものです。平成 12 年 10 月 2 日～17 日に調査しました。面積は 49 m²です。

調査の結果 縄文時代の焼土遺構 1 基、弥生時代後期の竪穴住居跡 4 軒が発見されました。出土遺物は多くありませんでしたが、

遺構調査後全景 調査区の 2/3 の面積を重なり合う住居址が占める



2号住居址貝層断面 北東より

2号住居跡から 1.3×1.0m、厚さ約 20cm の貝層が発見され、この付近から壺や甕などのかけらがまとまって出土しました。調査後、持ち帰った貝層のフルイかけ作業中にガラス小玉 1 点が見つかりました。

弥生時代の貝塚 三浦半島の洞穴遺跡に多くみられますが、稀に集落内に形成された貝塚も存在することは以前から知られていました。前号で紹介した磯子区三殿台遺跡でも中期の竪穴住居の柱穴から発見されています。貝の種類はハマグリ・マガキ・アカニシが多く、イノシシやシカの骨などもありました。小規模な点と貝の種類は似ていますが、獣骨がともなっていた点が異なります。

弥生時代後期のムラ 上台北遺跡の南南東 500m ほどの同一台地上に上台遺跡・下末吉遺跡があります。ほぼ同時期のムラの跡で、互いに密接な関連をもつものと思われます。また、中期の遺構や遺物が見つかっていないことから、その成立はいずれも後期になってからのことと考えられます。



2号住居址出土の貝類

1:マガキ 2:ハマグリ 3:カリガネエガイ 4:シオフキ 5:アカニシ

6:ウミニナ 7:ムシロガイ 8:イボキサゴ 9:フジツボ

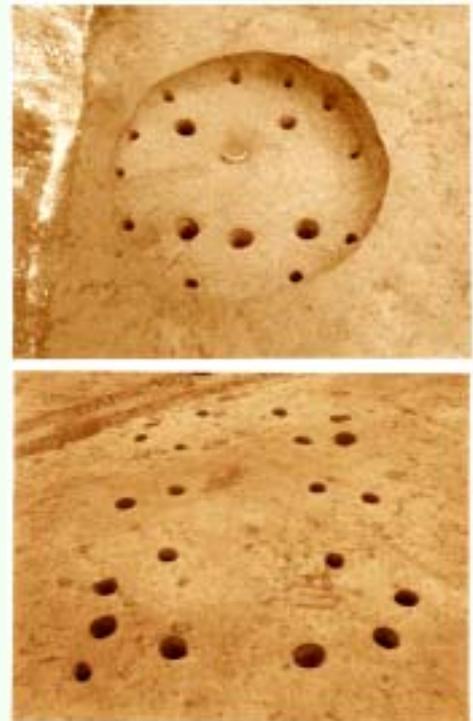
(干潟の砂浜や岩場に棲む。アサリは見られない。冬場に食べられたのだろうか。)

縄文時代のムラはドーナツ形？

～前高山遺跡の最新研究成果から～



前高山遺跡遺構全体図



写真上：竪穴住居跡

写真下：掘立柱建物跡

(2枚とも、モノクロ写真に着色)

縄文中期のムラは環状？

まえたかやま
前高山遺跡は、都筑区高山9付近に位置した、縄文時代中期のムラの跡です。

縄文時代中期のムラは、中央の広場あるいは墓域を環状(ドーナツ形)に囲むように住居跡が建ち並んでいるものと考えられてきました。確かに一見、このような環状をしている縄文のムラは数多く発掘されていますし、遺跡の全体図上で沢山の住居跡が環状に並んでいる様を見ると、当時のムラの姿もこのようなものであったと考えたくなります。しかし、ごく短い時間で考えた場合も、

当時のムラは果たして本当にそのような姿をしていたのでしょうか？長い時間続いたムラの営みの結果、最終的に地面に環状の痕跡が刻まれたと考えることはできないでしょうか。

前高山遺跡の好条件

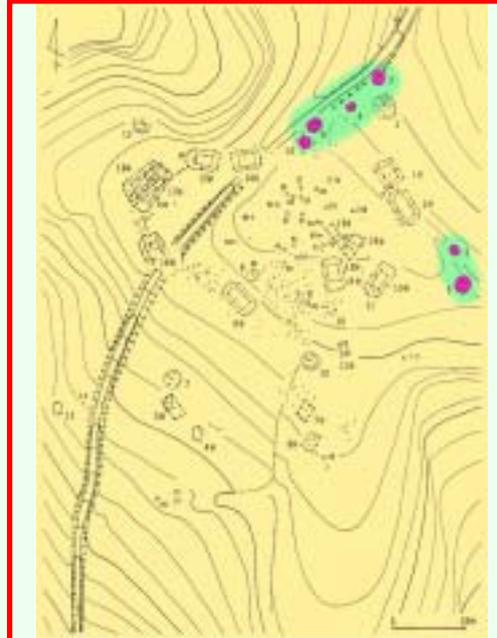
この疑問の答えを追究する上で、前高山遺跡はムラが存続した期間が短時間であったという好条件を備えていました。つまり、ある程度の時間幅は持っているものの、まるで写真を撮ったようなかたちでムラの瞬間的な姿が現代まで保存されていたのです。住居跡の数もそれほど多くないこと



全体で見ると一見、環状に見えますが...



各住居跡の年代を細かく調べ、年代ごとの住居分布を見てみると、環状とは言い難い分布になります。(年代のはっきりしない住居址も数軒ありました。)



前半段階(藤内 式前半)



後半段階(藤内 式後半)

から、これら住居跡の新旧関係を綿密に分析すれば、当時の一時期のムラの様子をさらに正確に知ることができるはずだ。

前高山遺跡は非環状

前高山遺跡で発見された 13 軒の住居跡も一見環状をしているように見えます。しかし、住居跡を 1 軒ずつ分析してみると、それらから出土した縄文土器の年代や各住居跡の建て替え回数などから、少なくとも新旧大きく 2 つの時期に分けられることが分かりました。そして、各時期ごとのムラの姿を見てみると、環状とは言い難い姿をしていることが分かったのです。

前高山のムラの姿を、すぐさま他の縄文ムラにも当てはめて考えることは簡単にはできませんが、少なくとも前高山遺跡は「環状ではなかった」という可能性をはっきりと示しています。

変わらぬ意識

環状であっても、非環状であっても変わらないのは、ムラの中に広場あるいは墓域を設け、そこには建物を建てないという意識が変わらず保持されたということです。ここから、その特別な空間を避け、そこを取り囲むかたちで建物を建てるという人々の意識の結果として環状のムラの跡が残ったと考えられます。

謎の残る掘立柱建物群

前高山遺跡では住居跡のほか、掘立柱建物跡も沢山発見されており、これらは環状に並んでいます。掘立柱建物は本来、北陸地方などでは住居として使われていましたが、横浜市域では様々な用途に使われていたと考えられ、前高山遺跡の掘立柱建物についてもそれらの性格の解明は今後の研究に委ねられています。

いなりまえこふんぐん

稲荷前古墳群は、東急田園都市線市が尾駅から北西へ約1kmのところにある丘陵上に位置しています。ここには、前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳、合わせて10基もの古墳と3基の横穴墓群があったことから、バラエティーに富む古墳が集中する「古墳の博物館」として注目を集めました。これらの古墳群は4世紀後半から7世紀にかけて継続的に作られたもので、丘陵の近くを流れる谷本川流域一帯を治めていた歴代有力者とその親族の墓であったと考えられています。このように、長期にわたる有力者たちの墓の変遷を今日に伝えるという点でこの古墳群は非常に貴重であり、神奈川県指定史跡に指定されています。

ここからは、アクセサリーである玉類(管玉・ガラス小玉)や耳飾り、鉄製品である直刀・鉄鏃・刀子などが出土しています。また、16号墳から出土した、壺・甕・といった土器(土師器)は、当時の鶴見川流域における古式土師器の様相を解明する上で重要な資料です。

現在はこれらの古墳のうち、15号墳(方墳)、16号墳(前方後方墳)、17号墳(方墳)が丘陵上に保存されており、遺跡公園として整備されています。

古墳の頂上に登り、眼下に広がる大地に目をやれば、葬られた有力者一族と同じ視点に立っている自分に気づくことができるでしょう。その土地はかつて彼らが治め、多くの人々の生活が営まれた土地だったので、ここは、今は遠い古墳時代とめぐりあえる場所であるといえるかもしれません。



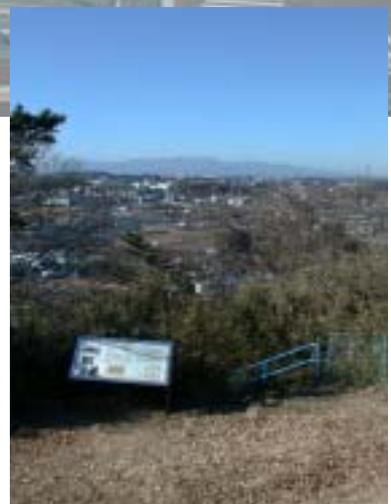
墳丘部は芝生張りの公園です



バス停近くに専用駐車場があります



駐車場から古墳へは緑道を上って



古墳の頂上から丹沢方面を望む

【交通】東急田園都市線「市が尾駅」から、「桐蔭学園前」行または「柿生駅北口」行バス利用「水道局青葉営業所前」下車。もしくは徒歩約15分。

埋蔵文化財センターのご案内

出土品や整理作業の様子が見学できます(予約が必要です)。埋蔵文化財や歴史に関する質問も歓迎します。

開所:午前9時~午後5時。土・日・祝日休み

交通:東横線「網島駅」より東急バス「勝田折返所」行終点。田園都市線「江田駅」より東急バス「網島駅」行「勝田」下車。

埋文よこはま 3

発行日 平成13年3月1日

編集・発行 財団法人横浜市ふるさと歴史財団
埋蔵文化財センター

〒224-0034 横浜市都筑区勝田町760

TEL 045-593-2406 / FAX 045-593-2403

前号で紹介した笠間中央公園遺跡は、現在見学できません。

「埋文よこはま」は、横浜地域で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。